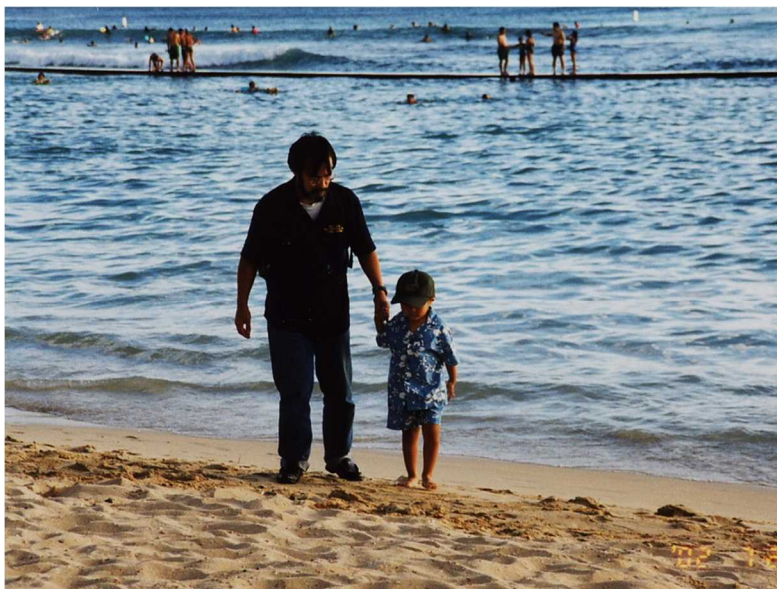


浜辺の物語 (案内板)



海は見えるか、海を守れるか？

見えない危険と向き合い海を楽しむための教養

西 隆一郎 著

本書の概要

本書は、海岸環境工学の専門家が現場での経験をもとに、「海の危険」「海岸の変化」「社会との関係」を一般読者向けにフィクションとして話すものである。特に、海の危険は「見えない」のではなく「見えていない」という視点を軸に、知識と経験によって海の見え方が変わる過程を描く。

単なる物語ではなく、体験・現場・社会・専門家の役割までを含めた「考えるための教養書」である。

渚は、変わらない。変わるのは、私たちの見え方である。海は、昔からそこにある。波は繰り返し打ち寄せ、砂は運ばれ、潮の満ち引きは変わらない。一見すると、何も変わっていないように見える。しかし、本当にそうだろうか。この本では、浜辺、渚、海岸に関わるさまざまな話をする。

海で起きる出来事、見えない流れの危険、現場で直面する複雑な現実、そして、決して簡単ではない合意形成、それらを通して伝えたいことは決して多くない。むしろ、一つに集約される。「見えているか、見えていないか」。海の危険は、特別な場所にだけあるわけではない。日常の中に、静かに存在している。ただ、それに気づくかどうかは、人によって違う。同じ海を見ていても、ただの風景として見る人、危険の兆候を感じ取る人がいる。海は変わっていない。変わるのは、人の「見え方」である。では、その見え方はどのようにして変わるのか。それは、特別な才能によるものではない。多くの場合、経験と少しの知識である。一度気づけば、次からは見えるようになる。見えるようになると判断が変わる。判断が変わると行動が変わる。そして、その積み重ねが未来を変える。しかし、ここで一つ注意しなければならない。見えるようになるということは、同時に、簡単には答えが出せなくなるということでもある。

現場に立てば立つほど、問題は単純ではないことが分かる。何を守るのか、何を優先するのか、どこまでができて、どこからができないのか、それらに明確な正解はない。それでも考え続けるしかない。そして、見えないものを、少しでも見えるようにする努力を続けるしかない。この本を通じて、もし読者の皆様の中で、海の見え方が少し変わった、危険に気づく視点が生まれた、物事を一步立ち止まって考えるようになったと感じていただけたなら、それだけでこの本の目的は達成されたと思っている。

海は、これからも変わらずそこにある。しかし、私たちの社会は変わり続ける。環境も気候も、そして、人の価値観も変わる。その中で、海とどう向き合うのかは、これからの私たちの選択に委ねられている。最後に、一つだけ。海に限らず、あらゆる場面で言えることがある。危険は、見えないのではない、見えていないだけである。そして、見ようとすれば、必ず見えるようになる。そして、見えないところで、気づきにくいところで、海の平和と安全を支えている人々がいる事に思いを馳せて頂ければ嬉しい限りである。その最初の一步が、この本であれば幸いである。



孵化して海に帰る子ガメ（これから太平洋を横断予定）



砂中で孵化し砂浜表面に出てきた子ガメ（夜間の赤外画像）

1章 海辺で起きた忘れられない出来事

1.1 ハリケーン被災調査 — 海岸・海洋工学者と東欧のスパイ

戦後、日本から渡米した某 O 博士は、世界初の原子力潜水艦に搭載される弾道ミサイルの発射に関わる研究に従事していた。特に、発射されたロケットが打ち上げ失敗を起こした場合に、自艦（潜水艦）へ誤って接触し自沈することを防ぐための対策について、確率的手法を用いた解析に取り組んでいたようである。その博士がある日、東欧の空港の待合室で、黒服の屈強な男達 (DIA) に囲まれ、「次に乗る飛行機では、隣に某国のスパイが座る。機密事項は決して話すな」と、静かに警告されたという。実際に機内で離陸間際に隣に座ったのはすらりとした妙齢の女性で、ロケット工学や高等数学の話の切れ目なく続けてきたそうだが、博士は機密に関わる内容には一切触れず、その場を乗り切ったという。この逸話を本人から直接聞いたとき、有名になると大変なのだと感じた。

ところで著者自身も、某国で金髪の若い女性に真剣な表情で手を握られ、目と目を見つめ合うという、ある種の危機的状況に遭遇したことがある。とは言え、これはスパイ事件ではなく、既往最大級の災害調査の最中の出来事であり、「無事に帰国できないかもしれない」と感じた瞬間であった。

1992年9月、当時“史上最悪級”と評されたハリケーンによる災害調査を行うため、著者はフロリダ大学海岸・海洋工学科の研究科長とともに、被災日翌日にレンタカーを借りてフロリダ州マイアミおよびその南部へ向かった。被災地に入るには、FEMA（連邦緊急事態管理庁）の指揮下にある州兵による身分確認をパスする必要があった。災害直後で住民の多くが殺気立っており、またアジア系の2人組が白いレンタカーに乗っているという目立つ構図は、現地ではどう見ても「狙われやすい存在」だった。

被災地には救助の手が届きにくい地域もあり、不法滞在者や武装した住民も少なくなかった。安全確保が極めて難しい状況下であったが、共同研究者である教授がフロリダ州 EPA（州政府環境局）の身分証を保持していたため、運良く被災地への立ち入りが許可された。初日の夕方、事前に聞いていた避難シェルターに到着すると、そこにあったのは避難所ではなく野戦病院だった。現地の人に尋ねたところ、「昨日までは確かに避難シェルターがあった」とのことで、事態の変化の早さに驚かされた。夜間外出禁止令の発令が迫り、車の燃料も心許ない。焦りながらも州兵の管理する事務所のような場所を探し出し、泊めてもらえな

いかと頼んだ。そこで登場したのが、迷彩服に身を包んだ金髪の若い女性だった。彼女は著者の手を強く握り、真剣な眼差しでこう言った。「あなたが大変なのは分かる。でも、ここには命の危機にある人がいる。あなたは元気だから、自分達で何とかして」。こうして、著者らは高速道路の入口を探して更に北へ向かうことにした。幾多の困難はあったが、何とか先遣隊としての調査を終えることができた。この調査で痛感したのは、災害現場での経験不足に加え、チーム編成の不備であった。急な出発だったとはいえ、東洋系の2人だけでなく、スペイン語圏出身者やWASP系米国人等を加えていた方が、地元住民との緊張を和らげ、情報収集や安全確保の面で有利だったと反省している。また、簡単な救急医療の知識を事前に身につけておくべきだったと感じた。この経験から得た教訓は明確である。「自分の力量を正確に見極め、小さなリスクには対処しつつ、大きなリスクは避けること」。この方針は、以後の現場調査の鉄則となっており、学生には親切心から教えることにしている。

ちなみに災害調査ではないが、某国の沈没船引き上げを支援した経験がある。依頼は引き受けたものの、東シナ海沿岸での現地調査が多いため、予期せぬ事態に巻き込まれるのではと不安であった。さらに、依頼された数値計算を誤る可能性もあり、精神的な負担は大きかった。数ヶ月後、北欧の大学で航跡波による運河の堤防侵食に関する共同研究に参加していた時のこと、ある事件が起きた。ホテルの朝食時、隣に座った3人のアジア系男性の話す言語や身なりから、某国関係者と直感した。逃げるわけにもいかず、静かに朝食を終えて研究室へ向かった。その後しばらくは、常に背後に注意を払う日々が続いた。今では国家公務員でもないのに、



暴風による飛来物で壊れた車

「君子危うきに近寄らず」を座右の銘としている。

※後日、米国人研究者から言われ気づいたのだが、ハリケーン・アンドリューの時には、被災が甚大すぎたために政府の身分を持たない研究者は、当初の一週間は被災調査に入れなかったという事であった。何であなたが被災翌日から現地調査に入っていたのかと詰問され、当時の状況を理解した次第であった。



暴風により壁が吹き飛んだアパートメント

1.2 インドでビーチを見ようと思ったはずが

-トイレの紙・人生のチャレンジ-

私が受験生だった頃、「四当五落」という言葉があった。つまり、4時間眠って残りの時間を勉強にあてれば大学に合格し、5時間眠れば落ちると言い伝えだ。実際、ほとんどの同級生が就職する田舎の高校で目の下にクマをつくって勉強した記憶がある。当時の受験生ジョークとして、東京の某有名予備校のトイレの壁に「紙（神）に見放されたら、ウン（運）は自分の手でつかめ」と書かれていると、地学の先生が教えてくれた。トイレトペーパーは、ただの一枚の紙に過ぎないが、なければ本当に困る。私はインド滞在中に、まさに「紙（神）に見放される」状況に陥った。

親友の結婚式に出席するため、電気もガスも水道も整備されていない熱帯雨林の奥地にあるプランテーション農家へ向かった。空港に迎えに来るはずだった友人とは会えず、紆余曲折を経てようやく到着した村では、「第二次世界大戦中のイギリス兵以外で、あなたが初めての外国人だ」と言われた。友人の両親はとても親切な方々だったが、英語が通じない。そこで、英語の分かるタクシー運転手の叔父さんがわざわざ通訳として滞在してくれた。ひと息ついてトイレに行こうと、カバンからポケットティッシュを取り出し、ポケットに入れようとしたところ、室内にいた友人の妹から「それ、何に使うの？」と尋ねられた時つい見栄を張って「眼鏡拭きだよ」と答えてしまい、ティッシュをテーブルに置いて席を立つ羽目になった。この家族がインドの最上位カーストのバラモンであることは知っていたし、「トイレで紙を使うのは不浄」とされるという話を思い出し、現地の慣習に従うべきだと思ったからである。実はマレーシア滞在時には常にポケットティッシュを携帯していたため、こうした問題は起きなかった。さて、和式に似たトイレにしゃがみこみ、用を足しながら「どうしよう」と考え、終わった後もしばらく呆然としていたが、最終的に覚悟を決め、水をかけながら左手で拭くことにした。「一枚の紙」、ただそれだけのものが、これほどまでに重要だと実感した瞬間だった。この日以降、友人に同行しバラモン社会の中で過ごしたため、トイレトペーパーを使えない日が続いた。特に体調を崩していた時は軟便なので、紙のない現実が本当に辛く、勇気が必要だったことを今でも鮮明に覚えている。ちなみに友人は、「日本留学直前に、都市部のホテルで1週間ほど宿泊し、トイレの紙の使い方を練習してから日本に来た」と語っていた。一方の私は、何の準備もないままハードランディングの体験をすることになった。こ

の経験を通して、食事の際には絶対に右手で食べ物を取り口に運び、握手も右手で行うことの大切さを深く理解するようになった。握手は「利き手を差し出すことで敵意がないことを示す行為」とされているが、私にとっては、「絶対にウン(チ)をつかんだ手では握りたくない」ことの表れでもあったのだ。

このインド訪問中のある日の夕方、親友のお兄様にインド洋に面するビーチに連れて行ってもらった。浜で涼風に吹かれる散歩が本当の目的ではなく、イギリスの文化になじんだ経験を持つお兄様が、ビーチの陸側にあるヤシ林の中に目立たない様にビールが飲める店があるからそこで一緒にビールを飲もうが目的であった。バラモンの家系なので公然とお酒を飲めず、インドの浜辺で一緒にひっそりと飲んだビールは、確か、kingfisher だった楽しい浜辺の記憶がある。



夕陽を眺めるためにビーチで憩う人々

1.2 黒い紙事件—Black as black paper— 異なる専門業界人の中で、 住民合意の場で、多言語の間で行う通訳業務に必要な事；

南米ウルグアイ出身の友人夫婦が、留学のために初めて日本へ向かう飛行機の中で、「黒い紙事件」が起こった。ヨーロッパ系のルーツを持つ彼らは、それまで和食をほとんど食べたことがなく、多少の不安を抱えて日系航空会社の飛行機に乗り込んだ。空の旅が始まり、ようやく落ち着いてきた頃、フライトアテンダントが見た目にも美しい和食を配膳してくれた。目で楽しみ、味に感動しながら順調に食べ進めていたが、最後に残った一品に困惑した。ライスボール（おにぎり）らしきものが黒い紙に包まれており、どう食べてよいのか全く分からなかったのだ。周囲を見回すと、他の乗客達も皆、同じように黒い紙で包まれたものを前にして手をつけられずにいる様子だった。合理的思考を持つ医師の友人は、「包んであるのだから、包みを剥がして食べるのだろう」と判断し、ゆっくりと黒い紙をはがし始めた。その様子を見ていた他の乗客達も次々と右へ倣えで紙をはがし始め、包まれていたご飯を口に、「デリシャス」と申し訳なさそうに呟いたという。皆、食べ方が分からず、誰かが最初にやってくれるのを待っていたのである。日本人の読者の方はもうお分かりだろう。そう、ライスボールを包んでいた「黒い紙」は海苔である。これが、日本文化に慣れていなかったウルグアイ人夫婦に起きた「黒い紙 (Black paper) 事件」だ。読者の皆様も、もし飛行機や新幹線等でおにぎりを前に戸惑っている外国人を見かけたら、ぜひ正しい食べ方を教えてあげて欲しいものである。

この逸話は、渚保全（海岸環境工学）の専門家として、専門分野が異なるために常識と言われるものが異なったりする専門家間の議論に参加したり、全く専門分野の知識がない一般市民が含まれる合意形成の場に関与したり、同業の専門家と言いながらも国が違うために技術的・科学的な哲学や思想の違いが存在する専門家の通訳を務めたりする場で、言葉の単なる通訳ではなく、話をしている当事者の背景を理解したうえで、話を聴いている相手にその人が分かる言葉（内容）に言い換えて、その場にいる全員の共通理解を図る役を担わないといけないことがある。国会の議事ではないが、相手が理解できようがどうかには構わず、言いたいことを言いつばなしという姿勢では、渚の環境を保全して次世代に残すことが出来ないと痛感している。ある意味で、動物と鳥類の除け者にされがちな蝙蝠のような存在であるが、渚保全（海岸環境工学）のスペシャリストになるためには、避けて通れない役割だと思っている。研究者と言うよりは、円滑な

コミュニケーションを図る技術者のような役割なので、若手や中堅の研究者にはあまりお勧めできない。しかも、誰か代わりを紹介してくださいと言われても、人選に困るといってもレアな存在である。

20年ほど前にアメリカから日本に来た国際学会の会長の講演を想定外で通訳するはめになった。しかも、ほぼ完璧にその役をこなしたために、ある事件もどきがあった。講演会後の懇親会で少し気を抜いてホッとしながら講演を行った国際学会の会長の横で必用な時だけのんびりと通訳をしていたら、北大の工学部長に突然「君、大学教員を辞めなさい」と言われ、思わずやってしまった。研究せずに職場をサボりここで通訳をやっている暇があるのかと叱責されてしまったと思ったものである。実際は、これまでも同時通訳がつくような講演会にはたくさん参加しているが、通訳された内容がよく分からないことが多い。しかし、あなたの通訳は言っていることが完璧に理解できた。教員をするにはもったいないと言われ、「馘にならずに済みそうだ」と思ったものである。

1.4 突発的な海岸・海洋災害の調査および災害支援

著者は、渚に大きな影響を及ぼす中・大規模の海岸・海洋災害に対する研究を継続している。加えて、近年は東日本大震災を契機に災害支援活動も実施している。これまでに関与してきた主な災害に、以下の様なものがある。なお、平成は自然災害の顕著な時代であったことを実感している。

1992年：ハリケーン・アンドリュー（自然災害として世界最大級の経済被害）

2004年：スマトラ沖地震津波（死者数世界最大級）

2011年：東日本大震災（数百年に一度の大規模災害）

2015年：火山噴火による口永良部島の全島避難

2016年：熊本地震（流域経由で海域も被災）

2018年：東シナ海におけるタンカー火災に伴う油類の大量漂着

2018年：硫黄山噴火による白濁水の流出

2,019年：ハリケーン・ドリアン（バハマ共和国において既往最大級の被害）

2021年：福徳岡ノ場海底噴火に伴う軽石の広域漂流・漂着

2024年：硫黄山での再白濁水流出

近年は著者の管理業務の多忙に伴い、災害現場へすぐに赴くことが難しく、対応に苦慮する状況もある。研究者としての初期は、主に災害の科学的調査に注力していたが、ある時期から「調査が将来の防災には役立っても、目の前の被災者の支えにはなっていないのではないか」との葛藤を感じるようになった。その後、被災地での実践的な災害支援にも取り組むようになり、現在では「善意（good will）」や「絆（きずな）」といった人と人とのつながりを大切にしながら、災害調査と支援活動の両立を模索しているその中で、災害支援に対する感謝の言葉を頂くこともある。例えば、「(年賀状の) 写真にある震災時の貸与機材とケースを見ると、先生が釜石合同庁舎 6 階まで階段を使って搬入して下さったことを思い出します。深く感謝いたします。本県の震災復興に長期にわたり多大なご支援を賜り、心より御礼申し上げます。今後とも本県水産業の復旧・復興のため、引き続きご助言をお願いいたします」といったメールを、岩手県の水産担当者からいただいたこともある。こうした被災者からの声を胸に、初心を忘れず活動を続けている。

また、多くの方が自然災害と認識していないが、大型鯨類の浜辺への打ち上げは、漂着個体の処理に関与する自治体としては自然災害級の出来事となる。著者の都市伝説もどきであるが、大型鯨類は何故か入試日に打ち上がる事が多い、ドローンによる調査を依頼される事があるが、入試業務をさぼり現地調査に行ってしまうと始末書では済まず、クビかなと思う事が続いた。



東日本大震災後の松川浦の風景

最近、バハマ共和国の大使およびバハマ共和国出身の国連シニア職員とハリケーン被災および災害復旧について話す機会があった。大使は、1992年のハリケーン・アンドリューの事も良く覚えていた。そして、奇遇であるが、国連のシニア職員は教え子の従妹で、ハリケーン・ドリアンの復興が芳しくないことを心配していた。

1.5 なぜ私は現場に立ち続けるのか

海は美しい。しかし、同時に非常に危険な存在でもある。私はこれまで、何度も命の危険を感じてきた。流れに巻き込まれそうになり、足を取られ、逃げ場を失いかけたこともある。それでも、現場に立つことをやめなかった。理由は単純である。他に出来ることがない専門バカである。しかも、「現場にしか、本当の答えがない」からだ。机上の理論だけでは近似解しかわからないし、本当の海を理解できない。現地に出、見て、感じて、初めて分かることがある。そしてもう一つ。現場には、必要としてくれる「人」がいる。海と共に生きる人々。災害に直面する人々。その生活を守るために、何ができるのか。それを考え続けることが、私の仕事であり、責任であると勝手に思っている。

海はやさしく、そして、とても怖い

第1章：海辺で起きた忘れられない出来事

- 1.1 ハリケーン被災調査 — 海岸・海洋工学者と東欧のスパイ
- 1.2 インドでビーチを見ようと思ったはずが — トイレの紙 ・ 人生のチャレンジ
- 1.3 黒い紙事件—Black as black paper— 異なる専門業界人の中で、
住民合意の場で、多言語の間で行う通訳業務に必要な事；
- 1.4 突発的な海岸・海洋災害の調査および災害支援
- 1.5 なぜ私は現場に立ち続けるのか

第2章：海辺で本当に起きていること

- 2.1 日本の海岸は、実はとても特別である
- 2.2 渚周辺における健全な自然環境ならびに水産環境の適切な維持
- 2.3 海と湖がつながる海跡湖（インレット）の海水交換

第3章：知らないと危ない海の話

- 3.1 海はなぜ人の命を奪うのか—渚の安全な利用（沿岸域の流れと水難事故予防）
- 3.2 海岸では海に背を向けるな
- 3.3 2種類の流速
- 3.4 サンゴ礁内の流れの先入観
- 3.5 海浜事故（水難事故）証明？
- 3.6 水難事故予防のための流況調査現場への警察介入？
- 3.7 修学旅行中の水難死亡事故（流れに関わる案件）
- 3.8 大学生の遊泳中死亡事故（流れに関わる案件2）
- 3.9 教育団体による死亡事故と予見可能性（流れに関わる案件）

第4章：現場で見た海の現実

- 4.1 現場に行くと、教科書は役に立たないことがある
- 4.2 海岸海洋災害調査
- 4.3 現地踏査で砂浜に半身埋まる
- 4.4 砂も水も境界線に関係なく移動する—自治体を跨るインレットや
国境河川の河口で起きた行政間および国際的な土地問題
- 4.5 境界線に関係なく砂は風で飛ぶ—人工的に砂浜を造る養浜の飛砂
で新しくできた砂丘の地権問題
- 4.6 砂の価値と漂砂をめぐる問題

- 4.7 砂が消えると土地が消える—渚を守るための海岸保全工事に関する訴訟
- 4.8 管理者責任・推奨責任、そして、境界線が大事
- 4.9 国際的な注目を浴びた海岸保全事業の訴訟問題
- 4.10 利益相反を含む海浜死亡事故（砂と流れに関わる案件）
- 4.11 緊急支援時の行政対応に関する事例 — 災害支援時の水質と底質の試料採取
- 4.12 生き物の生息環境ともなる砂浜（浜辺）および海底の保全と海水準上昇への課題
- 4.13 渚環境の安全性（防災から減災への移行）に関する社会貢献
- 4.14 渚を旅し海岸漂着物の実状を知る—国境がある様でない物質移動の話

第5章：合意形成という見えない戦場

- 5.1 渚と司法—近年、コンプライアンスが大事
- 5.2 法令順守・職業倫理の観点から見た海岸活動の事例
- 5.3 渚を利用する絶滅危惧種の卵の盗掘事件（絶滅危惧種案件）
- 5.4 渚を利用する絶滅危惧種のネット販売に関する未遂立件
- 5.5 司法に関与した事例
- 5.6 特殊な社会貢献（司法に関わる案件）
- 5.7 なぜ話し合っても決まらないのか—渚環境の保全に関わる合意形成

第6章：専門家になるための失敗の繰り返し

- 6.1 自己反省
- 6.2 海岸踏査にはご用心 — 失敗から学ぶ渚の調査法
- 6.3 現地踏査はできるだけ二人以上で！
- 6.4 海洋危険生物—ハブクラゲ
- 6.5 サメに追跡される —現場指揮者の能力も大事 —
- 6.6 能力を知る
- 6.7 チームの能力と信頼性
- 6.8 観測機材が水没—初心者に意外とよくある話—

第7章：専門家になるための修行—人は宝の商売—

- 7.1 フロリダ大学滞在記
- 7.2 海岸工学・海洋学の先達；Michel K. Ochi 教授
- 7.3 たった1枚の紙の凄い思い出 A series of ‘a piece of paper’ s
- 7.4 Corpus Christi— Texas A&M University
- 7.5 Costal and Hydraulics Laboratory, Waterway Experiment
Station, Corps of Engineers, U. S. Army (通称 CHL)

- 7.6 人を育てる喜びと責任ー他人を育てると自分も育つ
- 7.7 渚の環境保全スペシャリストを目指す優秀な博士課程学生
- 7.8 博士課程学生の人材教育は楽しくてつらい
- 7.9 渚保全のスペシャリストになりたい方々にー論文博士を目指す
社会人の覚悟
- 7.10 渚の専門家になるために血の滲んだ一枚の紙 Passport to
the club
- 7.11 留学の勧め

第8章：専門家という仕事の現実

- 8.1 専門家とは「答えを持つ人」ではない

謝辞

著者紹介

エピローグ；

渚は変わらない。変わるの私たちの見え方である。

浜辺の物語

海は見えるか、海を守れるか？ 見えない危険と向き合い海を楽しむための教養

西 隆一郎 著

短縮版；

第1章：海辺で起きた“忘れられない出来事”

1. 紙がなかった日 — インドで知った文化と生存

トイレットペーパーは、ただの紙である。しかし、それがないと、人は驚くほど無力になる。私はその事実を、インドの熱帯雨林の奥地で思い知らされた。親友の結婚式に出席するため、私はインドのある農村を訪れた。そこは電気も水道も十分ではなく、外国人が訪れることなどほとんどない場所だった。案の定、空港で友人と合流できず、なんとか現地に辿り着いた時には、すでに疲労困憊であった。家族はとても親切だったが、英語は通じない。唯一の通訳は、たまたま同行してくれた運転手の親戚である。そんな状況の中で、私は一つの重大な問題に直面する。トイレである。日本では当たり前にある「紙」が、そこにはなかった。しかも、現地では紙を使うこと自体が「不浄」とされている文化である。ポケットに入れていたティッシュを使おうとした瞬間、家族の一人に尋ねられた。「それ、何に使うの？」私はとっさに答えてしまった。「眼鏡を拭くものです。」その瞬間、紙は使えなくなった。そして私は覚悟を決めた。水を使い、左手で処理するという、現地の方法に従うしかなかった。その時、私は思った。たった一枚の紙が、人間の尊厳をここまで左右するのか」と。この経験は、単なる文化の違いではなかった。「当たり前」と思っているものが、いかに脆く、そして相対的なものかを教えてくれた出来事だった。

2. 黒い紙を食べる人たち — 異文化の誤解

飛行機の中で、ある奇妙な光景が広がった。南米から来た友人夫婦が、日本行き機内で和食を食べていた。美しい盛り付けに感動しながら食事を進めていたが、最後に残った一品で手が止まる。黒い紙に包まれた、丸い食べ物。どう見ても「紙」である。しかし、食べ物として出されている以上、食べるしかない。彼らは周囲を見渡した。すると、他の乗客も同じように困っている。誰も手をつけない。やがて、一人の乗客が意を決した。ゆっくりと黒い部分を剥がし、そのまま口に入れた。「デリシャス…」その一言で、空気が変わった。周囲の乗客も次々と同じ行動を取り始めた。黒い紙を剥がし、食べる。読者の方はもうお分かりだろう。それは紙ではなく、「海苔」である。しかし、その場にいた人々にとって、それは「未知の黒い物体」でしかなかった。この出来事は、私にとって強烈な示唆を与えた。専門家同士の議論でも、まったく同じことが起きる。言葉は通じているのに、意味が通じていない。そして誰かが最初に「理解したふり」をすると、全員がそれに従ってしまう。海岸の合意形成の場でも、これと同じ現象を何度も見てきた。理解していないのに、理解したことになる。それが後に、大きな問題を生む。

3. 災害現場で見た「善意」と「限界」

私はこれまで、数多くの災害現場に立ってきた。ハリケーン、津波、火山噴火、油流出。自然は容赦なく人間の営みを壊す。研究者として現地に入るとき、私はいつも葛藤を抱えていた。「この調査は、誰のためになるのか」将来の防災には役立つかもしれない。しかし、目の前の被災者の助けにはならないのではないか。ある時から、私は考えを変えた。調査だけでなく、「支援」にも関わるようにしたのである。機材を運び、情報を提供し、現場でできることをやる。後日、ある自治体の担当者からメールをもらった。「震災時に運んでいただいた機材を今でも覚えています。本当にありがとうございました。」その一文を読んだとき、私は少しだけ救われた気がした。科学は万能ではない。しかし、人の善意は、時に科学以上の価値を持つ。

4. なぜ私は現場に立ち続けるのか

海は美しい。しかし、同時に非常に危険な存在でもある。私はこれまで、何度も命の危険を感じてきた。流れに巻き込まれそうになり、足を取られ、逃げ場を失いかけたこともある。それでも、現場に立つことをやめなかった。理由は単純である。「現場にしか、答えがない」からだ。机上の理論だけでは、海は理解で

きない。現地に立ち、見て、感じて、初めて分かることがある。そしてもう一つ。現場には、「人」がいる。海と共に生きる人々。災害に直面する人々。その生活を守るために、何ができるのか。それを考え続けることが、私の仕事であり、責任である。

1章まとめ； 海は、ただの自然ではない。そこには、人の生活、文化、そして命がある。この章で紹介した出来事は、一見すると雑多な体験に見えるかもしれない。しかし、すべては一つにつながっている。「人は、自分の知らない世界を、簡単には理解できない」そしてそれは、海岸の問題にも、そのまま当てはまる。次の章では、「その海辺で、実際に何が起きているのか」を、もう少し詳しく見ていきたい。

第2章：海辺で本当に起きていること

1. 日本の海岸は、実はとても特別である

日本は、世界でも有数の「海の国」である。海に囲まれているから、というだけではない。実は、日本の海岸線は約3万5千キロメートルにも及び、その長さ多様性は世界でも際立っている。砂浜、岩場、サンゴ礁、干潟、藻場。これらすべてが、同じ国の中に存在している。そしてもう一つ重要なのは、日本人の多くが海の近くに暮らしているという事実である。人口の約4分の3が沿岸域に集中していると言われている。つまり、日本にとって海岸とは「遠い自然」ではなく、生活そのものに直結した場所なのである。

2. 渚は、ただの境界ではない

海と陸の境目。それが「渚」である。しかし、この場所は単なる境界ではない。むしろ、最も多くの役割を担っている場所である。例えば、次のような機能がある。生き物のすみかになる、波の力を弱める（防災）、水をきれいにする、漁業を支える、人が集い、文化が生まれる。一見バラバラに見えるこれらの役割は、すべてつながっている。例えば、砂浜があることで波のエネルギーが吸収され、背後の街が守られる。同時に、その砂浜は生き物の住処となり、漁業にも影響する。つまり渚とは、自然・社会・経済が交差する場所なのである。

3. 海と陸は、見えないところでつながっている

私たちは、海と陸を別のものとして考えがちである。しかし実際には、この二つは切り離せない。山に降った雨は川となり、やがて海に流れ込む。その水とと

もに、土や栄養も運ばれる。この栄養があるからこそ、海の中でプランクトンが増え、魚が育つ。逆に、陸からの供給が減ると、海は急速にやせていく。実際に、ダムや堰によって川の流れが変わると、海岸の砂の供給も減る。その結果、砂浜が痩せ、消えていくこともある。さらに近年では、もう一つの問題がある。水がきれいになりすぎている。下水処理によって栄養が取り除かれた水が海に流れ込むため、海に必要な栄養まで減ってしまう場合がある。きれいな水が、必ずしも良いとは限らない。この事実は、直感に反するかもしれないが、自然のバランスは単純ではないということを示している。

4. 港は、文明の入り口だった

少し視点を変えてみよう。なぜ人は、海の近くに住むのか。その理由の一つが、「港」である。古くから、人や物の移動は海を通じて行われてきた。そのため、海岸には港が作られ、そこに人が集まり、街ができた。さらに重要なのは、肥沃な土地が海の近くに生まれやすいという点である。川が運んできた栄養が蓄積され、農業に適した土地が形成される。その土地で食料が生産され、港から外へと運ばれる。この流れが、文明の発展を支えてきた。一方で、この仕組みが崩れるとどうなるか。例えば、ダムによって土砂の供給が止まると、海岸は侵食され、土地は失われていく。実際に、ナイル川のデルタでは同様の現象が起きている。海岸は、作られるものでもあり、失われるものでもある

5. 私たちは、海を理解しているのか

ここまで読んでいただいた方は、海が単なる風景ではないことに気づかれたと思う。しかし、もう一つ考えてほしいことがある。私たちは、本当に海を理解しているのか。海岸の問題は、しばしば単純化される。「砂浜が減っている」、「海面が上昇している」、「環境を守るべきだ」、どれも間違いではない。しかし、それだけでは不十分である。実際の現場では、もっと複雑な問題が絡み合っている。土砂の供給、流れの変化、人間活動の影響、社会的な合意、これらが同時に作用している。そのため、簡単な解決策は存在しない。このことを理解することが、すべての出発点になる。

2章まとめ； 海辺は、ただ美しいだけの場所ではない。そこには、見えない循環、複雑なバランス、人間社会との深い関係、が存在している。そしてその仕組みは、私たちが思っている以上に繊細である。次の章では、「その海で、実際にどんな危険が起きているのか」を具体的に見ていく。

第3章：知らないと危ない海の話

1. 海はなぜ人の命を奪うのか

海は美しい。そして、驚くほど静かに人の命を奪う。山の事故と違い、海の事故は「突然」に見えることが多い。しかし実際には、ほとんどの場合、原因は存在している。問題は、それが見えていないことだ。例えば、穏やかに見える海でも、水の中では強い流れが発生していることがある。しかもその流れは、目に見えない。危険は存在しているが、認識されていない。これが、海の事故の本質である。

2. 「流れ」は、見えない最大の危険である

海で最も危険なのは何か。波でも、風でもない。流れ（カレント）である。特に注意すべきは、沖に向かって流れる強い流れである。いわゆる「離岸流」と呼ばれるものだ。この流れに入ると、人は簡単に沖へ運ばれる。泳ぎが得意かどうかは関係ない。むしろ、泳げる人ほど無理に戻ろうとして体力を消耗し、危険な状況に陥る。では、この流れはどこで発生するのか。答えは意外と単純である。砂浜の“くぼみ”や“地形の変化”の場所。しかし、それを目で見て判断できる人はほとんどいない。つまり、危険は目の前にあるが、誰も気づかないという状況が日常的に存在している。

3. なぜ毎年同じ場所で事故が起きるのか

不思議に思われるかもしれない。なぜ同じ海岸で、何度も事故が起きるのか。理由は明確である。危険な場所は、毎年ほとんど変わらない。海岸の地形は変化するが、流れが発生しやすい条件はある程度決まっている。そして、その情報は十分に共有されていない。現場で調査をしていると、「ここは危ない」と直感的に分かる場所がある。しかし、その知識は一般にはほとんど伝わっていない。その結果、観光客が同じ場所で事故に遭う、地元の人だけが危険を知っている、事故の原因が「不注意」で片付けられるという構図が繰り返される。

4. 「自己責任」では説明できない現実

水難事故はしばしば「自己責任」と言われる。確かに、無理な行動が原因の場合もある。しかし、それだけでは説明できない事故も多い。なぜなら、危険を知る機会がほとんどないからである。学校教育の中で、水辺の安全について体系的に学ぶ機会はほとんどない。大人になっても、正しい知識を得る場は限られている。その一方で、海は身近なレジャーとして利用されている。このギャップが、事故を生む。つまり問題は、「個人の問題」ではなく「社会の問題」でもあると

いうことである。

5. 現場でしか分からないことがある

私はこれまで、多くの事故現場を見てきた。正直に言えば、「なぜここで事故が起きたのか分からない」というケースもあった。しかし、現地で観察を続けると、少しずつ見えてくる。流れのパターン、地形の特徴、波の入り方、それらを組み合わせると、危険の“再現性”が見えてくる。現在では、ある程度の条件が揃えば、危険な流れの発生を予測することも可能になっている。しかもその精度は、天気予報よりも高い場合がある。それにもかかわらず、その情報は十分に活用されていない。

6. ドローンが変えた「安全な調査」

かつて、危険な場所を調べるには、実際にそこへ行くしかなかった。そのため、調査そのものが命の危険を伴うこともあった。現在では、ドローンの活用により状況は大きく変わった。上空から海を観察することで、流れのパターン、地形の変化、危険箇所の分布を安全に把握できるようになった。これは単なる技術の進歩ではない。「人が危険に近づかなくてもよい」時代の到来である。

7. 海は楽しい。しかし、理解しないと危険である

ここまで読んで、「海は危険だ」と感じたかもしれない。しかし、それは正確ではない。海は本来、とても魅力的な場所である。問題は、理解しないまま近づくことである。流れを知る、地形を知る、危険な条件を知る、それだけで、多くの事故は防ぐことができる。逆に言えば、知らないままでは、防ぎようがない

3章まとめ； 海の事故は、「運が悪い」から起きるのではない。見えていない危険が存在するから起きる。そして、その多くは、知識によって回避できるにもかかわらず、その知識は十分に共有されていない。ここに、海岸に関わるもう一つの問題がある。次の章では、「その海辺で、実際に何が起きているのか」を、現場の視点からさらに詳しく見ていく。

第4章：現場で見た“海の現実”

1. 現場に行くと、教科書は役に立たないことがある

教科書には、きれいに整理された世界が書かれている。原因と結果、理論と式、整った説明。しかし、現場に立つと、それらは簡単に崩れる。波は同じよう来ない。地形は均一ではない。人の行動も予測通りには動かない。現場は、常に「例外」で満ちている。だからこそ、現場を見ることが重要になる。そしてもう一つ。

現場には、データだけでは見えないものがある。

2. 災害は単独では起きない

災害というと、多くの人是一个の原因を想像する。台風、津波、地震。しかし、実際の現場では、それらは単独で起きているわけではない。例えば、ある海岸で大きな被害が出たとする。その背景には、もともとの地形の変化、長年の土砂供給の減少、過去の工事の影響、当日の気象条件、が重なっている。災害は「重なり」で起きる。そして、その重なりは、現場に行かなければ見えてこない。

3. 海岸漂着物が語る“見えない社会”

海岸に打ち上げられるものは、単なる「ごみ」ではない。それは、社会の流れを可視化したものである。例えば、ロシア語の表記がある容器、中国語やハンガルの製品、漁業関連の資材、家庭ごみ、これらはすべて、「どこから来たのか」という情報を持っている。そして多くの場合、最も多いのは外国のごみではない。自分たちの出したものである。つまり、問題は外から来るのではなく、内側にあるという現実が見えてくる。

4. 海は、世界とつながっている

海に境界線はない。地図の上では国境が引かれているが、海水は自由に移動する。そのため、一つの地域で起きたことが、別の地域に影響を与える。漂着物もそうである。ある国で出たものが、別の国の海岸に流れ着く。しかし、それは一方向ではない。すべてはつながっている。この視点を持つと、海岸の問題は「地域の問題」ではなく、「世界の問題」として見えてくる。

5. 「なんとかしてほしい」と言われる現場

海岸の保全に関わると、必ずと言ってよいほど言われる言葉がある。「なんとかしてほしい」。その気持ちはよく分かる。海岸は生活の場であり、失われれば困る。しかし、現場に立つと、別の現実も見えてくる。「なんとかならない場合」がある。例えば、土砂の供給が止まっている、海面が長期的に変化している、すでに地形が大きく変わっている。こうした状況では、従来の方法では対応できないことも多い。それでも、「専門家ならできるはずだ」と期待される。その時、私はいつも悩む。どこまでが科学で、どこからが希望なのか

6. 科学と現実の間にあるギャップ

理論的には正しいことが、現場ではそのまま使えないことがある。例えば、海外で作られた理論をそのまま日本に適用すると、実際の状況と合わない場合がある。自然条件が違うからである。それにもかかわらず、「理論的に正しいから」

という理由で使われることがある。ここに、大きなギャップが生まれる。現場では、そのズレがそのまま問題として現れる。だからこそ必要なのは、現場で確かめることである。

7. 見えるようになると、別の世界が現れる

ここまで読んでいただいた方は、少しずつ気づき始めているかもしれない。現場には、情報があふれている。ただし、それは「知っている人」にしか見えない。砂の色の違い、波の入り方、流れの筋、打ち上げられた物の配置、これらはすべて、意味を持っている。そして、それを読み取ることができるようになると、同じ海が、まったく違って見えるようになる。

4章まとめ； 現場とは、単にデータを集める場所ではない。現実がそのまま現れている場所である。そこでは、理論だけでは説明できないこと、人の思いが絡む問題、社会の構造、が同時に存在している。そしてそれらは、「見ようとしなければ見えない」。しかし、見方を知れば、確実に見えるようになる。ここまでで、海の現実の一端が見えてきたと思う。しかし、問題はここからさらに複雑になる。「誰が、どのように海を守るのか」。次の章では、合意形成という“もう一つの見えにくい問題”を扱う。

第5章：なぜ海岸は守れないのか

1. 「守る」という言葉の難しさ

海岸を守る。この言葉は、とても分かりやすい。そして、とても誤解を生みやすい。守るとは何か。今の形を維持することか、災害から人を守ることか、自然環境を守ることか。実は、これらはすべて同時には満たせない場合がある。守る対象が違えば、答えも変わる。この前提を理解しないまま議論を始めると、必ずどこかで対立が生まれる。

2. 砂浜は「固定されたもの」ではない

多くの人は、砂浜を「そこにあるもの」として認識している。しかし実際には、砂浜は常に動いている。波によって運ばれ、風によって移動し、川から供給されて維持される。つまり砂浜は、“作られ続けている状態”にある。そのため、何か一つでもバランスが崩れると、簡単に形が変わる。例えば、ダムによって土砂供給が減る、海岸構造物で流れが変わる、海面が変化する。これらが重なると、砂浜は自然に後退する

3. 「原因は一つではない」という難しさ

海岸侵食について議論すると、原因を一つに求めたくなる。「海面上昇が原因だ」、「ダムが原因だ」、「工事が悪い」。しかし現実には違う。複数の要因が同時に作用している。しかも、それぞれの影響の大きさは場所ごとに異なる。つまり、単純な説明は、ほとんどの場合間違っている。にもかかわらず、分かりやすい説明ほど広まりやすい。ここに、認識のズレが生まれる。

4. 「海面上昇で砂浜が消える」という話

よく言われる話がある。「海面上昇で日本の砂浜の多くが消える」。この主張は、完全に間違いとは言えない。しかし、そのまま受け取ると誤解を招く。なぜなら、その多くは、特定の条件を前提とした理論だからである。しかもその条件は、日本とは異なる環境で作られたものも多い。現場で観察すると、変化が小さい場所、逆に堆積が起きている場所も存在する。つまり、一つの理論では説明できない現実がある

5. 科学は万能ではない

科学は強力な道具である。しかし、それは万能ではない。特に海岸の問題では、観測データの不足、長期変化の不確実性、地域ごとの差が大きく影響する。そのため、「正確に予測すること」が難しい場合がある。それにもかかわらず、「科学的に正しい答え」を求められることが多い。ここで、問題が生まれる。確実性がないのに、確実性を求められる。

6. 「できること」と「できないこと」

現場では、よくこう言われる。「なんとかしてください」。その言葉に応えたいと思う。しかし、すべてに応えられるわけではない。例えば、土砂の供給が長期的に減少している、地形が大きく変わっている、気候条件が変化している。こうした状況では、元の状態に戻すことはできないこともある。つまり、「できること」と「できないこと」がある。この現実をどう伝えるかが、専門家にとって非常に難しい課題になる。

7. 本当の問題は「見えていないこと」である

ここまでの話をまとめると、海岸が守れない理由の一つではない。しかし、その根底にあるものは共通している。問題の構造が見えていない、何を守るのかが共有されていない、原因が単純化されている、科学の限界が理解されていない。これらが重なり、議論がかみ合わなくなる。つまり、見えていないものが多すぎるのである。

8. それでも、できることはある

では、何もできないのか。そうではない。できることは確実に存在する。現場のデータを蓄積する、地域ごとの特性を理解する、無理な対策を避ける、長期的な視点で考える。そして何より重要なのは、「見えるようにすること」である。問題の構造を共有し、現実を正しく理解する。それがすべての出発点になる。

5章まとめ； 海岸が守れない理由は、技術が足りないからではない。問題が複雑で、見えにくいからである。そしてその多くは、見ようとすれば見えるようになるにもかかわらず、その機会が少ない。この章で扱ったのは、海岸の問題であると同時に、「社会の問題」でもある。次の章では、合意形成という最も難しい課題を扱う。

第6章：合意形成という“見えない戦場”

1. なぜ話し合っても決まらないのか

海岸の問題は、最終的には人が決める。しかし、その決定に至るまでの過程は、決して単純ではない。会議を開き、説明を行い、意見を聞く。一見すると、合理的なプロセスである。それにもかかわらず、結論が出ないことが多い。なぜか。理由は単純である。見ているものが違うからである

2. 同じ言葉でも、意味は違う

例えば「海岸を守る」という言葉。行政にとっては、防災や予算の問題である。住民にとっては、生活や思い出の問題である。研究者にとっては、科学的な問題である。同じ言葉を使っているが、その中身はまったく異なる。言葉は共有されているが、意味は共有されていない。この状態では、議論はかみ合わない。

3. 「理解したふり」が最も危険である

会議の場では、不思議な現象が起きる。誰かが説明をし、それに対して皆がうなずく。しかし、そのうなずきが、本当に理解を意味しているとは限らない。分かったような気がする、反対しづらい、流れに従う、こうした心理が働く。そして、理解されていないまま、合意が形成される。これが後に、大きな問題を引き起こす。

4. 合意は、一度できても崩れる

さらに厄介なのは、合意は固定されたものではないということである。一度まとまったはずの案が、新しい情報、人の入れ替わり、感情的な反発によって簡単に覆されることがある。現場では、「私たちはその場になかった」、「聞いていない」という理由で、議論が振り出しに戻ることもある。つまり、合意は“プロ

セス”であって、“結果”ではない

5. 科学だけでは解決できない理由

専門家としては、科学的に正しい説明をすれば理解されると考えがちである。しかし現実とは違う。数値が正しくても納得されない、データがあっても受け入れられない、理屈より感情が優先される。人は、必ずしも合理的に判断しない。これは欠点ではなく、人間の性質である。したがって、科学だけでは合意は形成できない。

6. 必要なのは「翻訳」である

では、どうすればよいのか。ここで重要になるのが、「翻訳」という役割である。これは単なる言語の翻訳ではない。専門用語を一般の言葉に置き換える、科学的説明を生活の文脈で語る、相手の立場に合わせて意味を再構成する。つまり、“相手に見える形に変換すること”である。この作業を行わなければ、見えている人と見えていない人の間に、永遠に溝が残る

7. 誰がその役割を担うのか

理想的には、その役割は専門家が担うべきである。しかし現実には、その役割を担える人は非常に少ない。なぜなら、科学を理解している、現場を知っている、社会の構造を理解している、人の感情に配慮できる、これらすべてが求められるからである。結果として、合意形成は属人的になりやすい

8. 見えるようになれば、対立は減る

ここで、もう一度原点に戻る。なぜ対立が起きるのか。多くの場合、その原因は、見えていないことである。相手の立場が見えていない、問題の構造が見えていない、制約条件が見えていない、これらが重なると、議論は感情的になる。逆に言えば、見えるようになれば、対立は減る。完全になくなるわけではない。しかし、少なくとも建設的な議論は可能になる。

6章まとめ： 合意形成とは、単なる話し合いではない。異なる世界の見え方をすり合わせる作業である。そしてその難しさは、見えているものが人によって違うことにある。しかし、見えないものが見えるようにする努力を続ければ、少しずつではあるが、前に進むことができる。ここまでの、自然の仕組み、危険の構造、現場の現実、社会の複雑さが見えてきた。では、その中で、専門家はどのような役割を果たすべきなのか。次の章では、専門家という仕事の現実について考える。

第7章：専門家という仕事の現実

1. 専門家とは「答えを持つ人」ではない

多くの人は、専門家に対して次のようなイメージを持っている。正しい答えを知っている、問題を解決できる、判断を下せる。しかし、現場に立つと、その認識は大きく変わる。専門家とは、答えを持つ人ではない。むしろ、「分からないことの範囲を知っている人」である。

2. 現場では「判断」が求められる

研究の世界では、時間をかけて考えることができる。しかし現場では違う。今どうするか、この方法でよいのか、どのリスクを取るのか、その場で判断を求められる。しかも、その判断には責任が伴う。完全な情報がそろえることはほとんどない。それでも決めなければならない。これが専門家の現実である

3. 「分かりません」と言えるか

専門家にとって最も難しいことの一つは、「分かりません」と言うことである。期待されている場面では、何らかの答えを示さなければならない。しかし、不確実なことを断定することは、かえって危険である。そのため、分からないことは分からないと伝える勇気が必要になる。これは簡単なようでいて、非常に難しい。

4. 見えているものを「伝える」責任

専門家にはもう一つの役割がある。見えているものを、他者に伝えることである。しかしこれは、単なる説明ではない。相手の理解レベルに合わせる、専門用語を使わない、誤解を避ける、「伝わる形」に変換する必要がある。ここで重要になるのが、第6章で述べた「翻訳」である。

5. 専門家は「橋渡し役」である

現場では、さまざまな立場の人が関わる。行政、住民、研究者、事業者、それぞれが異なる視点を持っている。その中で専門家に求められるのは、橋渡しの役割である。科学と社会をつなぐ、理論と現場をつなぐ、異なる価値観をつなぐ、どちらか一方に立つだけでは足りない。

6. 専門家は「万能」ではない

ここで強調しておきたいことがある。専門家は万能ではない。できることには限界がある。すべてを予測することはできない、すべての問題を解決することはできない、すべての人を納得させることはできない。それでも、できることを積み重ねるしかない

7. 「善意」と「責任」の間で

現場に関わると、多くの「善意」に出会う。人を助けたい。環境を守りたい。地域を良くしたい。しかし同時に、その善意が十分でない場合もある。意図せず問題を悪化させることもある。そのため専門家は、善意だけでなく、責任を持って行動する必要がある

8. なぜこの仕事を続けるのか

ここまで読むと、専門家の仕事は大変に思えるかもしれない。実際、その通りである。正解がない、責任が重い、理解されないこともある。それでも、この仕事を続ける理由がある。現場にしかない価値があるからである。そしてもう一つ。見えるようになった世界を、伝えたいからである

7章まとめ； 専門家とは、すべてを知っている人ではない。見えているものを理解し、伝え、判断する人である。そしてその役割は、人と人をつなぐことにある。ここまでで、海の仕組み、危険の構造、現場の現実、社会の複雑さ、専門家の役割が見えてきた。最後に考えたいのは、「これから、どうするのか」。次の章では、未来の海と私たちの選択について考える。

第8章：失敗から学ぶ — 見えなかったものが見えるようになるまで

1. 失敗は、記録されないことが多い

研究の世界では、成功した結果が記録される。論文になるのは、うまくいった事例である。整ったデータと、整理された結論。しかし、失敗は、ほとんど記録されない。うまくいかなかった調査、判断を誤った事例、危険に直面した経験、これらは、表に出ることが少ない。その結果、同じ失敗が繰り返される

2. 当時の私は、何も見えていなかった

振り返ると、明らかに危険だった場面がいくつもある。しかし、その時の私は、それに気づいていなかった。危険は存在していたが、見えていなかった。例えば、足場が不安定な砂地、流れの変化、周囲の状況。今であればすぐに判断できることでも、当時は分からなかった。つまり、知識や経験がなければ、世界は違って見える

3. 小さな判断ミスが、大きな結果を生む

海岸での作業は、陸上とは異なる。一つ一つの判断が、そのまま結果につながる。少し無理をする、もう一步踏み込む、もう少しだけ続ける、その積み重ねが、取り返しのつかない状況を生むことがある。海では、「あと少し」が非常に危険である。

4. 「運が良かっただけ」という現実

正直に言えば、これまで大きな事故にならなかったのは、運が良かっただけと
思うことがある。適切な判断ができた場面もある。しかし、それだけでは説明で
きないことも多い。偶然、状況が悪化しなかった、たまたま助かった、一步違え
ば危険だった。こうした経験は、少なくない。現場には、制御できない要素が存
在する

5. 失敗は「見えるようになる」きっかけになる

では、失敗は無意味なのか。そうではない。失敗は、世界の見え方を変える。
一度経験すると、同じ状況に敏感になる、小さな違いに気づく、危険の兆候を感
じ取れる。つまり、見えなかったものが見えるようになる

6. 経験は、単なる回数ではない

経験が重要だと言われる。しかし、それは単なる「回数」ではない。同じこと
を繰り返しても、必ずしも理解が深まるわけではない。重要なのは、経験をどう
解釈するかである。なぜ危険だったのか、どこに兆候があったのか、何が判断を
誤らせたのか、これを考えなければ、経験は知識にならない。

7. 次の世代に何を残すべきか

ここで一つの問題がある。失敗は共有されにくい、恥ずかしい、評価に影響す
る、記録として残りにくい。その結果、次の世代が同じ失敗を繰り返す。本来で
あれば、失敗こそが最も価値のある情報であるはずである。

8. 「帰らない」という選択は許されない

ある言葉がある。「出発せよ、しかし帰らなくてもよい」。これはある組織の覚
悟を示した言葉である。しかし、現場で活動する者としては、「必ず帰る」こと
が前提である。どれほど重要な調査でも、命を失っては意味がない。そのため
には、無理をしない判断が必要になる。

9. それでも現場に向かう理由

ここまで読むと、現場に出ることが危険に思えるかもしれない。実際、その通
りである。それでも現場に向かう理由がある。現場でしか得られないものがある
からである。そしてもう一つ。見えるようになった世界を、次に伝えるため

8章まとめ； 失敗は、避けるべきものである。しかし同時に、学ばなければな
らないものでもある。そして、見えていなかったものに気づく機会でもある。こ
の章で伝えたかったのは、経験とは、世界の見え方が変わることである。最後
に残る問いは一つである。「私たちは、これからどう海と向き合うのか」